
共同研究の目的と経過

共同研究「身体と人格をめぐる言説と実践」

山田慎也

1 研究の目的

この共同研究は2006年より2008年まで、国立歴史民俗博物館の個別共同研究として実施されたものである。

本研究はひとの人格について様々な言説や実践を取り上げ、従来あまり注目されなかった身体性について分析し、近代化過程における歴史の変遷と民俗的多様性について、フィールド調査、文書や絵画資料などに基づいて検討を行うことを目的とした。

ひとは社会的存在であり、その人格は身体を通して表出され、他者から把握されている。つまり、身体は物質的存在でありながら、物質として還元することはできず、人格との分離は容易ではない。特に近年、生命工学の発達によって、臓器移植やヒト胚性幹細胞の培養など、身体の物質的操作が行われるようになり、その倫理性も問われるようになってきている。こうしたことが社会的に問題になるのも、身体が人格を帯びた存在であり、ひととしての根幹的な問題に通じるからである。

一方で、身体と人格をめぐる問題は現代医療の分野だけでなく、従来から生活の過程の中で生じている。誕生や死、憑依現象などがそうした例としてあげられる。それは従来、霊魂と肉体という関係で捉えられる場合も多かった。しかし霊魂は、実際の語りや表象の場面では、身体性を帯びて表されることが多く、その関係を切り離すことは難しい。さらに、現代社会において、霊魂への信念が希薄になってきており、霊魂観として現代的な事象を把握することは困難である。しかし例えば、誕生や死の場面において、人格として捉え直すことで、現代における生者と死者の関係を理解することが可能となるなど、従来の研究の蓄積を生かして、現代との連関を検討することが可能となる。

本研究では、それぞれ別個に取り上げられてきたこうした問題系を、生活過程における人格をふまえた身体イメージに焦点を当てて捉え直し、現代医療、シャーマニズム、生命観を中心に民俗学、歴史学、文化人類学、社会学など関連諸科学の中で総合的に論じるものである。

ちなみにこの共同研究は、総合誌『歴博』第133号の特集「身体イメージ」の企画を代表者が担当する中で、その課題の必要性を認識し、共同研究として具現化したものであった。

2 研究組織

このように広範な研究範囲であるために、それぞれの専門とするテーマの中で課題を認識し、議論を深めていくために、専門性と学際性を意識して研究会を組織した。なお所属は2008年3月の

時点のものである。

館外

池上良正	駒澤大学・文化学部・教授
浮ヶ谷幸代	立教大学・講師
梅屋 潔	東北学院大学・教養学部・准教授
金菱 清	東北学院大学・教養学部・准教授
川添裕子	松蔭大学・異文化コミュニケーション学部・准教授
木下光生	神戸女子大学・講師
田中藤司	成城大学・民俗学研究所・研究員
谷川章雄	早稲田大学・人間科学部・教授
田原範子	四天王寺国際仏教大学・社会学部・准教授
出口 顯	島根大学・法文学部・教授
土居 浩	ものづくり大学・建設技能工芸学科・専任講師
長沢利明	法政大学・講師
村上興匡	大正大学・文学部・准教授
宮下克也	北里大学・講師

館内

岩淵令治	本館・研究部・准教授
上野祥史	本館・研究部・助教
内田順子	本館・研究部・准教授
小池淳一	本館・研究部・准教授 副代表
山田慎也	本館・研究部・准教授 代表

3 研究経過

研究会は3年間で13回会が開催された。それぞれの専門の立場からの報告をするだけでなく、よりメンバー相互の理解を深めていくため、青森県むつ市、新潟県佐渡市、宮城県気仙沼市と、年に一回ずつフィールドワークを含めた研究会を行った。また対象とする課題が広範囲のため、ゲストスピーカーを招くだけでなく、東北大学宗教学研究室、現代医療研究会や慶應人類学研究会などと研究会を合同開催することで、議論の深化を計り、多くの関心ある研究者にも成果の還元に努めた。

2006年度

◇第1回研究会 2006年6月17日～18日（於：国立歴史民俗博物館）

山田慎也 「共同研究の趣旨説明」

山田慎也 「人格をめぐる民俗学的課題」

宮下克也 「人の〈始期〉—民俗学と法制史的視点から—」

梅屋 潔 「魂の重さ：物理的メタファーとしての身体」

◇第2回研究会 2006年7月22日～25日（於：青森県むつ市）

東北大学宗教学研究室との共催

恐山および下北半島のテラコ、墓地のフィールドワーク

小池淳一 「下北の民俗儀礼と霊魂の表象」

鈴木岩弓（東北大学，ゲストスピーカー）「恐山信仰の現代的展開」

池上良正 コメント

◇第3回研究会 2006年11月18日～19日（於：国立歴史民俗博物館）

土居 浩 「インターンシップ」という通過儀礼—ものづくり大学のモノグラフ ver1.5—」

田原範子 「ガーナ・アサンテ地域の身体と人格をめぐる言説」

村上興匡 「告別・追悼と科学的死生観—中江兆民と岸本英夫をめぐる—」

◇第4回研究会 2006年12月16日～17日（於：国立歴史民俗博物館）

現代医療研究会との共催

出口 顯 「北欧の国際養子のアイデンティティ」

浮ヶ谷幸代 「現代医療における身体の言説と実践—医療的身体と「自分のからだ」

川添裕子 「外見をめぐる言説と実践」

◇第5回研究会 2007年2月24日（荒川ふるさと文化館）

「杉田玄白と小塚原の仕置場」の展示見学と現地のフィールドワーク

2007年度

◇第6回研究会 2007年5月12日～13日（於：国立歴史民俗博物館）

谷川章雄 「江戸の墓にみる個人と遺骨の扱い」

木下光生 「近世後期日本の賤民の自己認識と解放運動—近世史研究における身体と人格，言説と実践—」

田中藤司 「『墓籍』史料論—死者の記録・表象・管理—」

◇第7回研究会 2007年6月23日（於：早稲田大学）

現代医療研究会と合同セッション「死と身体をめぐる言説と実践」

山田慎也 「死と身体—葬儀における死体の取り扱いを通して」

大岡頼光（中京大学，ゲストスピーカー）「宗教教育における介護と死—スウェーデンを中心として」

池上良正 「文化的資源としての死者供養—mourning 論を参照点として—」

◇第8回研究会 2007年11月23日～26日（於：新潟県佐渡市）

佐渡島内内海府，外海府地域，国仲平野および小木の墓地や宗教施設のフィールドワーク
岩本通弥（東京大学，ゲストスピーカー）「佐渡のイエ・墓・先祖―無縁と戦没者との関係性から」
梅屋 潔 「新潟県佐渡村落におけるイエと婚姻―94年のフィールドノートを中心として―」
山田慎也 「佐渡の葬送儀礼と身体観」

◇第9回研究会 2008年3月1日（於：国立歴史民俗博物館）

長沢利明 「佃島の盆踊り」
内田順子 「シャーマニズムと映画」

2008年度

◇第10回研究会 2008年6月21日～22日（於：国立歴史民俗博物館）

金菱 清 「「不法占拠」地域におけるふたつの人格をめぐる言説と実践」
浜 雄亮（日本学術振興会特別研究員，ゲストスピーカー）「苦しむことと集うこと」

◇第11回研究会 2008年10月11日～13日（於：宮城県気仙沼市及びその周辺地域）

気仙沼市およびその周辺地域における民間宗教者や旧家の民俗についてのフィールドワーク
東北学院大学 OB 会気仙沼支部および気仙沼市リアスアーク美術館の協力を得た。
ミニシンポジウム（於：気仙沼中央会館）「気仙沼地方の民俗」

◇第12回研究会 2008年11月8日（於：慶應義塾大学）

慶應人類学研究会との共催
阿部年春（埼玉大学名誉教授，ゲストスピーカー）「方法としての習俗―ケニア・ルオ社会における影（テイボ）をめぐる―」
佐藤守弘（京都精華大学，ゲストスピーカー）「遺影写真の視覚性／触覚性」

◇第13回研究会 2009年12月13日～14日（於：国立歴史民俗博物館）

上野祥史 「中国墓葬資料の身体論的考察」
岩淵令治 「大名家菩提寺・葬礼」
成果の報告に向けての総合討論

4 研究成果

共同研究では，身体を通して現出する人格について，さまざまな言説や実践を検討し，とくに近代化過程における歴史的変遷と民俗的多様性について検討してきた。

2006年度は，従来の霊魂観や広義の医療における身体観と人格の関係について取り上げ，研究課題をめぐる現代の状況について，問題意識を共有化した。まずひとの一生においては，出生時におけるひととしての認識について民法や刑法制定の背景を検討し，法制と民俗的認識の相克を明ら

かにした。

一方でひとの死に際しても、身体状況が大きく変化する時であり、死の前後やその後の祭祀においては、身体認識が大きく変容するときである。青森県の恐山および下北地方のフィールドワークにおいて、死者の人格表象が様々な形で人々に希求され、形作られており、その際に衣料等が重要な表象の材料となっていくなど、身体の連関が調査と研究会によって明らかになった。一方で死者の人格と死生観との連関も報告され、他者との関係性の視点も重要であることが提示された。

また日本だけでなく、海外の諸文化においても身体を媒介として他者との関係性が構築されていることが指摘された。さらに現代医療の現場においては、美容整形と人格との関係、逆に精神疾患における身体意識の関係なども照射され、身体と人格の相互的な関係が示された。身体的差異のある国際養子のアイデンティティー形成の過程や技術習得の身体化についても報告され、問題提起を含め対象の広さがあらためて浮き彫りになった。

2007年度は、引き続き従来の課題とともに、前近代における人格の取扱いについても検討を行った。墓制においては墓籍簿の存在が近年注目されるようになり人格表象の研究の可能性を示した。また墓誌や埋葬のあり方と人としての人格と階層の連関が指摘された。さらに賤民と位置づけられた人々のアイデンティティーにおける言説と実践の乖離が指摘され、社会的存在としての言行の分析の必要性を改めて認識した。

「死と身体をめぐる言説と実践」というテーマのセッションでは、葬送儀礼やその後の死者供養、さらにはスウェーデンにおける介護と死等の報告を通して、近代化をへて死者の人格の位置づけの変化を確認した。また新潟県佐渡島のフィールドワークにおいては、墓地や社寺、民間宗教者などのフィールドワークと研究報告によって、佐渡地方のイエと生者と死者との関係を婚姻や葬制、墓制との関連から検討し、イエを基礎とした人々の人格形成について認識が深まった。さらに盆踊りにおける死者の表象のあり方や映像を通した視線の変化など、身体技法を通しての人格の把握が重要である点も指摘された。

2008年度は、最終年度であり、総括を目指すとともに、これまで2年間に扱うことのできなかったテーマを中心に上げた。病気という通常とは異なる状態における人格表象について検討し、病の認識と他者との関係性の変化が提示された。また空港など物質を人格として捉える現象を通して、社会紛争が可視化され解決に至る過程の分析が行われ、人格表象の多様な社会的機能が明らかになった。また影を例としてひとの表象と習俗との関係、また美術史の立場から写真という技術性により、遺影の視覚性と身体性を通しての人格表象が形成されていることなどが提示され、広範な視点が多面的に捉えられることが明らかになった。

なお、2007年2月3日には、東京津田ホールにて歴博映像フォーラム「現代の葬送儀礼」が開催され、このフォーラムは現代の葬儀や墓地という死者の表象化の現代的展開について、製作された研究映像「現代の葬送儀礼」全4部のうち3部が上映され、共同研究員でもある村上興匡氏と土居浩氏と山田慎也の報告が行われ、他の共同研究員も参加し共同研究の一助となった。

以上のように、ひろく人文社会科学における人間観と身体との問題について現在改めて留意して研究を構築する必要があることがこの研究会によって明らかになった。そのため、学際分野における検討は研究の深化の上でも重要であることを再認識し、各人がこうした問題意識を共有し、それ

ぞれの研究に基づいて報告書を作成したのであった。

(国立歴史民俗博物館研究部)